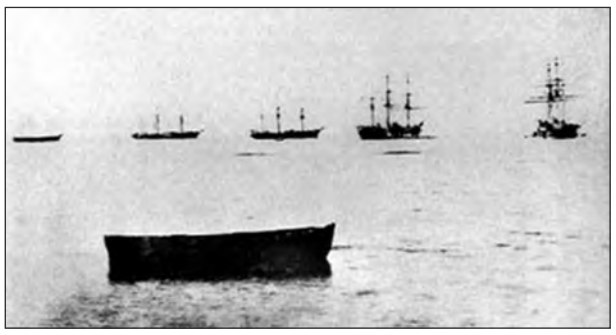
咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて⑫　終焉

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

鳥羽伏見の戦いの処分

朝廷は先の“鳥羽伏見の戦い”の責任を追及する形で、幕府側の大名・旗本三十二名を処罰の対象となる「朝譴者」として発表した。戦いが始まったとき藩主が江戸在府だったため、家老らの判断で朝廷側に付いた淀・稲葉藩筋から、この情報は江戸表の一部に伝えられた。だが朝廷側の情報不足からこの「朝譴者」なる名簿は杜撰極まりなく、在阪の老中首座・酒井雅楽頭といった最高責任者も見落とし、参戦の実体が分からない理由で小浜藩主ら数名も曖昧な処分とされていた。名簿を手に入れた徳川家新執行部の一部が、この情報不足を逆手にとって、目障りな邪魔者を含む関係者の謹慎処分をおこなった。まず老中格・松平豊前守はじめ「朝譴者」名簿に載る全員に加え、便乗処分として名簿には名の挙がっていない小笠原壱岐守、滝川播磨守ら重臣も登城禁止となった。この処分によって、僅か半月ほど前に任命されたばかりの新執行部の中から、前将軍慶喜の側近中の側近、平山図書頭を罷免させることに成功した。この結果、大久保越中守忠寛（一翁）や勝安房守義邦（海舟）が旧幕府を代表する立場となり、官軍との交渉を委ねられた。そして二月二十二日には官軍の東海道への進発にあわせ、慶喜が恭順を示して江戸城を退出し、上野・寛永寺に謹慎した。



慶応四年（1864）八月十九日、品川から江戸湾脱出を図る旧幕府の榎本艦隊。

江戸城無血開城の真相

東征大総督府下参謀・西郷隆盛は三月十五日を江戸総攻撃の日と決めていた。三月九日幕臣の山岡鉄舟が命がけで駿府の西郷の陣に単身乗り込み話をつけ、三月十四日に大久保や勝と会談して江戸城は無血開城されたというのが通説である。しかし近年、研究者からこうした通説を否定する有力な新説が出されるに至っている。

三月十三日に西郷は木梨精一郎を横浜に派遣して、英公使パークスに戦闘による負傷者の救護を頼んでいるのである。これに対しパークスは顔色を変え「恭順を示している慶喜に対する攻撃は万国公法違反であり、戦争になれば横浜居留の英国人にも被害が及び、貿易も大打撃を被る。もしあえて江戸を攻撃をするならば英国はそれなりの対処をする。」と木梨に迫った。パークスに救護を頼んだということは、この時点まで西郷は江戸を攻撃するつもりであったが、パークスの警告により大久保や勝との会談時にはすでに方針転換していたと見るべき、というのである。

英国艦隊はこのとき西日本に展開しており、江戸周辺には横須賀のフランス艦隊がいるだけであった。パークスの真意は貿易の損出に加え、もし戦争になって、旧幕府と関係が良好なフランスが協力して勝利すれば、日本との関係においてフランスにイニシアティブを握られてしまい一歩先んじられることは必定である。パークスの強い警告は、こうした状況下で発せられたのであった。西郷にとっても英国は薩摩藩の最友好国であり、まだ先の見えないこの時点で、英国との関係を悪化させるのは得策ではない。かくして西郷は江戸攻撃を断念したと見るべきであろう。

榎本艦隊に参加し、蝦夷地を目指す旧幕臣たち。

塚原の亡命と小野の入獄

四月四日、官軍は江戸城に入城した。徳川側は直後の八日、更なる恭順を示す為に、勅諚処分と称して独自の罪人を発表した。朝廷側も「朝譴者」名簿が情報不足で曖昧なものだったので、徳川側に処分を一任する形となった。
勅諚処分とされたのは、

＊揚座敷入「重罪・厳科の処・格別の寛典を以て死一等を宥められ」： 塚原但馬、小野内膳。
＊永蟄居「厳科の処・格別の寛典を以て」： 滝川播磨、平山図書。
＊蟄居「同」： 設楽備中、榎本対馬。
＊閉門「同」： 室賀甲斐、大久保主膳、戸田肥後、永井玄蕃。

驚くべきことに、老中などの重臣ではなく、兵站を担当しただけの、もちろん朝廷側の名簿にも載っていない勘定奉行並の小野友五郎が入牢処分となったのである。まるで社長や居並ぶ専務を差し置いて、部長か課長クラスがスケープゴートとなり、詰腹を切らされたようなものである。

もう一人の塚原但馬守も近代化推進の有司であったが、立場が逆転した勝からの報復処分を事前に察知して、松本寿太夫とともにアメリカへ急遽亡命した。塚原は万延元年遣米使節団に随行し、松本は小野遣米使節団の副使として渡米経験があったので、アメリカに僅かな望みを繋いだのであった。かくして小野友五郎ただ一人、“鳥羽伏見の戦い”の責任を取らされて伝馬町の牢獄に入牢した。

榎本艦隊始動

当然ながら幕臣には薩長に恭順することを潔しとしない者も多く、主戦派の海軍副総裁・榎本武揚らは徹底抗戦を唱えて品川の旧幕府艦隊を支配下に置き、榎本対馬守や永井玄蕃頭など多くの幕臣が集まった。横浜には佐賀藩の中牟田倉之助率いる新政府艦隊が集結し、両雄が対峙した。

榎本艦隊に参加することの許しを求めた幕臣の林董（ただす）に対し、実父の佐藤泰然は「幕府の腐敗極まり、滅亡は必至なり。しかし人には節操というものがある。大義名分などという言葉の蔭に隠れわが身の危うきを避けんとするがごときは、臆病の至りにて、われ卑しむところなり。」と息子を激励し送り出した。泰然は幕末の優秀な医師で、順天堂大学の基礎を作った人物である。

箱館五稜郭に旗揚げした旧幕臣による蝦夷政権のメンバーたち。前列左から海軍奉行・荒井郁之助、総裁・榎本武揚。後列左から江差奉行並・小杉雅之進、会計奉行・榎本道章（対馬）、開陽丸士官見習い・林董、蟠龍丸艦長・松岡磐吉。松岡と小杉は咸臨丸太平洋横断航海で渡米した士官。

小栗の最期

引退して上州権田に帰農し、後進の教育に身を捧げるつもりであった小栗上野介の周辺も慌しくなっていた。世の混乱に乗じて暴徒二千人が周辺の村々を襲撃し権田に迫ったが、小栗はフランス式陸軍訓練を受けた息子の又一や家来ら十六名と村民百名で追い払った。

一難去った間もなく、官軍の東山道軍が迫り、「小栗に謀反の疑いあり」と出頭命令が出された。これはまったくの言いがかりであったが、小栗は村民に迷惑がかかるのを憚って出頭に応じたところ、何の取調べもなく、烏川の水沼川原で家来ともども斬首されてしまった。

このときの捕縛や処刑に手を下したのは東山道軍監・原保太郎（長州・22歳）と豊永貫一郎（土佐・18歳）の若い二人であった。東山道軍鎮撫総督には岩倉具視の次男・具定（17歳）と副総督に三男の具経（16歳）が任命されていたが、これはまったくのお飾りである。しかし原や豊永が独断で処刑を決定したとも思われず、高崎城に弁明に出向いた又一も家来とともに首を刎ねられたことを考えると、あらかじめ小栗親子の処分が決定されていた可能性が高い。とするとその上部の板垣退助なり、西郷隆盛などから旧幕府切っての頭脳明晰な小栗を危険視し、殺害指令が出され始末したことが考えられる。

慶応四年閏四月六日（西暦5月27日）、日本の近代化に尽くした幕末の天才は、謀略による無実の罪で上州の地の露と消えてしまった。享年四十二歳であった。

榎本艦隊の北走と箱館戦争

八月十九日、咸臨丸は品川から東北を目指して江戸湾脱出を図る榎本艦隊と共に出航した。しかし折からの嵐で銚子沖で流され下田に漂着し、蟠龍丸に救助されて修理のため清水港に入港した。咸臨丸は長年の酷使で故障が続き、二年ほど前に蒸気機関は取り除かれ帆船として使用されていたのである。蟠龍丸は先に出航するが、咸臨丸は修理に手間取るうちに官軍に追いつかれて砲撃を受け、白旗を揚げて投降した。乗り込んできた官軍兵士と艦上での小競り合いから斬り合いとなり、咸臨丸の士官十数名は銃撃されて海に投げ込まれた。海を漂っていた遺体を見た清水湊の次郎長親分は、「仏に官軍も賊軍もあるか」と死体を引き上げ、鄭重に葬って任侠の心意気をみせた。戦死者のなかには長崎海軍伝習所一期生で、小野らとともに日本初の蒸気軍艦「千代田形」の船体構造設計をした優秀なる技術者・春山辨蔵もいた。

榎本は箱館に旧幕臣による蝦夷政権を樹立して明治新政府に対抗したが、財政的にすぐに行き詰まっていった。戦力的にもアメリカから回航された甲鉄艦（ストーンウォール号）の入手に失敗し、頼みの旗艦開陽丸が江差で座礁沈没して一気にダウンした。明治二年、箱館戦争が本格化するが、五月十八日、力尽きた榎本らは五稜郭を開城し、新政府に下った。

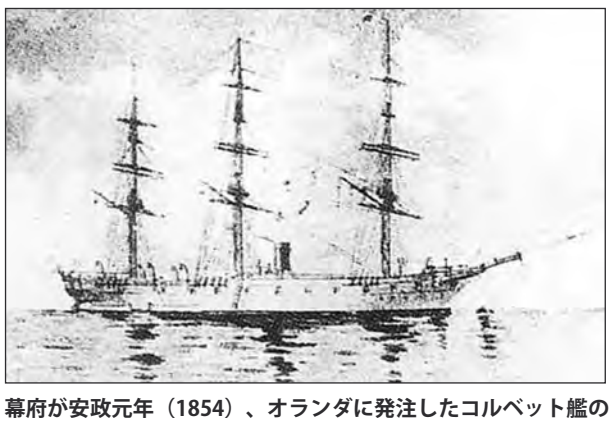
蝦夷政権の本拠地となり、総裁・榎本武揚はじめ、新撰組出身の陸軍奉行並・土方歳三らが新政府と戦った箱館五稜郭。

咸臨丸の運命

戊辰戦争によって一万八千石から二十五石に削減され、窮乏極めた仙台藩白石城の片倉家の旧臣四百一名を北海道へ開拓移住させるために、新政府所属の艦船となっていた咸臨丸は明治四年九月十九日（片倉家の記録では二十日夕・新暦の11月2日）、小樽へ向け函館を出航した。津軽海峡を航海中、咸臨丸は座礁事故を起こして木古内町サラキ岬沖に沈没した。嵐に遭って遭難したというのが政府の公文書記録であるが、木古内の村人たちが遭難と聞いて提灯を手に浜辺に集まったり、何隻も小船が救助に向かったことや、浜辺にかがり火を炊いたという片倉家の日記類の記録は、すべて暴風雨を否定するものである。家老の三木が咸臨丸から助けを求めて北国の初冬の海を浜まで泳いできたことや、全員が救助されていることからも、嵐だったという報告は疑わざる負えない。また公文書には全員救出されたと記載されるが、救助後に死亡した高橋仁吉なる者が木古内の大泉寺に埋葬されており、出航の日付をずらして遭難と無関係なことを装ったことが考えられる。真相は米国人船長の操船ミスが原因で、天候良好にもかかわらず難破したともなると、戊辰戦争後に困窮した旧藩士たちを開拓に送り込んだ新政府の政策に傷をつける事態にもなりかねず、咸臨丸に乗艦していた開拓使役人たちが日時や天候の記録を改竄して、失策を消し去った疑いが高い。ちなみに白石城の片倉家が開拓移住した場所が、現在の札幌市白石地区である。

就役から十四年、太平洋横断航海や小笠原群島探検など長崎海軍伝習所出身の海軍士官たちと華々しく活躍した咸臨丸は、ここに終焉を迎えたのである。

（続く）



幕府が安政元年（1854）、オランダに発注したコルベット艦の咸臨丸。同時に発注された朝陽丸と電流丸は同型の姉妹艦である。咸臨丸は明治四年（1871）、北海道サラキ岬沖に沈没し最期を迎えた。